

大通院旧境内遺跡

静岡県浜松市新橋町 大通院旧境内遺跡発掘調査報告書

1. 大通院旧境内遺跡発掘調査の経緯

本書は、静岡県浜松市新橋町748番地、浜松市立新津中学校校庭において、財団法人浜松市文化協会が実施した、大通院旧境内遺跡の発掘調査報告書である（平成14年度、教文第2-4号）。

大通院旧境内遺跡は、かつて、新津中学校と隣接の新津小学校校地とその周辺を含む広大な範囲に存在した、臨済宗方広寺派の中本山、禅定山大通院の跡地にあたる。的傳一着によって応永8年（1401）に開創され、境内に多くの塔頭をかかえる大寺院だったと伝わるが、大正15年（1925）に焼失し、現在はほとんど面影がない。発掘調査は今回が初めてである。

今回の発掘調査は、新津中学校の体育館が解体新設されるのに先立ち、拡幅される建物のうち、遺跡に影響を及ぼすと判断された、約100m²を対象とした。発掘調査は、浜松市教育委員会総務課から財団法人浜松市文化協会が受託し、浜松市教育委員会（浜松市博物館）の指導のもとに実施した。発掘調査にかかる費用は、浜松市が負担した。調査に関わる記録ならびに出土品は、浜松市博物館で保管している。

調査期間と現場調査体制は以下のとおりである。

a. 現地試掘調査 2001年8月24日

太田好治・鳥井正俊

b. 現地発掘調査 2002年4月17日～4月23日

太田好治・井口智博

c. 整理作業 2002年4月17日～7月31日

鈴木一有・井口智博・中村玲子・太田好治

試掘調査では、体育館予定地に6個所の試掘坑を設定し、そのうち遺構の残存する3個所を中心として、本調査区を決定した。残りの3個所は、学校廃棄物が厚く堆積する擾乱層である。

本調査でも、学校廃棄物が著しく、遺構検出面積はわずかとなつたが、寺院にかかわる遺物を得ることができた。なお、期間中、新津中学1、2年生が全員、校地内の遺跡発掘を体験した。また、新津公民館でも成果を速報することができた。



上 発掘前全景
下 発掘調査のようす
重機によって表土を除去。



2. 大通院旧境内遺跡周辺の歴史的環境

浜松市新橋町は、JR東海道線浜松駅から南西に約4km、遠州灘に近い海岸砂丘（砂堤列）上に位置する。古くからの集落がある砂丘上の海拔は、3m弱程度である。砂丘の途切れる東側と集落の北側には、海拔1m台の低湿地が広がり、水田地帯となっているが、現在では埋め立てが進んでいる。かつて、この低地には、沼田池や蓮池（高塚池）という沼池があり、馬込川に通じていた。時代をさかのばれば、馬込川河口部と連なる内湾が存在したと考えてよい。

大通院が成立したころの当地は、浜松荘の一部だった。大通院には、今川氏真の発給した文書が確認されており、「浜松荘新橋郷」という地名も見られる。浜松荘は、現浜松市域の中央部から南西部を含む莊園だが、実体は必ずしも明らかではない。馬込川沿いの現船越、八幡、早馬町付近には、街道と河川が交差する位置に「ひくま」と呼ぶ市および宿が発達していた。竜揮寺以南の馬込川は大きく蛇行し、内水面の名残を思わせる。白羽付近には、中世の貝塚が点在し、法蔵寺が吉良氏開基であるなど、浜松荘の外港が存在したと推定される。

このころの東海道の位置についても定説はないが、「ひくま」から西は、江戸時代の東海道と重なる可能性が高い。ただし、「二つ御堂」より東のいわゆる八丁縄手（鳥居縄手）は、戦国時代末に新設された道路である。現増築、若林町付近で中世の東海道を旅するひとびとから、大通院は、街道南の水面越しに眺望を集め大御藍を誇ったに違いない。



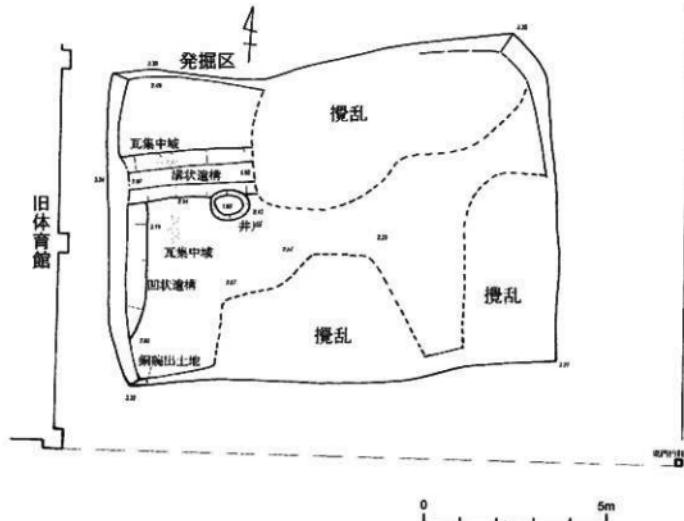
大通院旧境内遺跡周辺の旧地形と遺跡の分布図

1916年の地形図に加筆。馬込川河口部から大通院北側に回り込む、大きな古水面を捉唱したい。

浜松莊の中核神社は、現八幡町にある浜松八幡宮と考えられるが、大通院に近い小沢渡町には、この八幡宮の故地といふ伝承のある八幡山がある。また、神ヶ谷町の賀久留神社もかつて神ヶ谷八幡宮と称し、浜松莊西域に末社を展開していた。この点でいえば、当地付近は、浜松八幡宮の祭祀場、つまり浜松莊東域に属していよう。大通院に近い田尻町にも内湾を利用した港があったと伝承される。馬込川東岸の白羽付近だけではなく、西岸にも中世の港が推定されるのである。大通院の成立にあたって、こうした富と権益が背景にあったと考えれば、大寺院が当地に立地し、運営された理由を理解しやすい。

3. 大通院旧境内遺跡発掘調査の成果

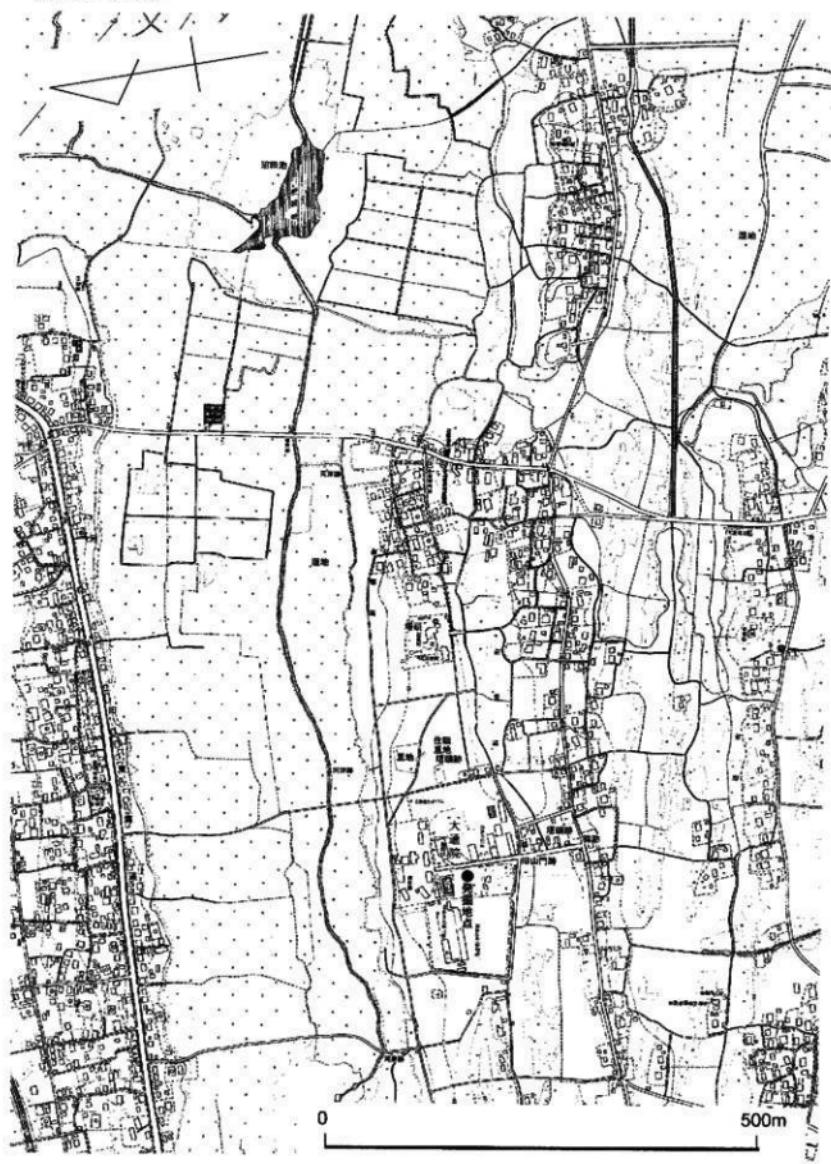
今回の調査域は、中学校体育館建設予定地の南東部、約100m²である。中学校と小学校の間にある南北直線道が江戸時代の伽藍中軸線といわれ、山門や開山堂または舍利殿が並んでいたという。基壇はすでに削平されたというので、建物跡を検出できる可能性は低かったが、現地表から約1mほど下の砂丘面において、区画溝や素掘り井戸、瓦溜りを検出した。区画溝は、江戸時代の伽藍と方向が合う。建物の北の区画と推定する。火災と思われる焼土や炭化物も広範囲に検出された。また、これらと方向の異なる凹地があるが、発掘範囲だけでは性格を明らかにできなかった。ただ、創建時と江戸時代の伽藍配置が異なっていたことを示唆する。



大通院旧境内遺跡発掘調査区平面図

江戸時代中期以降の伽藍でいう舍利殿の北西にあたると推定される。火災後の廃棄物が多くった。

大通院旧境内遺跡



大通院旧境内遺跡周辺の旧地形図

1957年の地形図に加筆。大通院と旧東海道の間に広い低地があり、かつては河川交通が可能だった。

出土遺物は、瓦を中心に多岐にわたった（6ページ以降に実測図と写真）。瓦は、江戸時代中期に棟瓦が発明されてから以降のものである。このうち、「大」の字紋の軒瓦は、移築現存する大通院山門の旧瓦（10ページに写真）と同版である。山門は天明8年（1788）再建と伝わるのと、瓦の年代と矛盾しない。出土瓦は発掘区近くにあった舍利殿のものと考えられるが、舍利殿も天明8年再建と伝わる。山門と同じ瓦が使用されたのだろう。ただし、出土軒瓦には、他の模様も存在する。部分的な葺き替えが想像される。このほか、駄斗瓦や菊丸瓦・輪違い瓦などの飾り瓦が注目される。いずれも屋根の上に組棟を設けるための棟込瓦で、再建された舍利殿が組棟であったことを意味する。これらの瓦は、熱を受けて亦変が見られるものもあり、また焼土塊や炭化物も周囲に集積することから、火災によって崩落したものと考えられる。

陶磁器類も、大半は舍利殿で使用されたものであろう。45の鉄釘と46の銅碗も同様である。40のかわらけは、戦国時代末の可能性があり、再建舍利殿よりも先行する。さらに、44の山茶碗は、小破片であるが鎌倉時代のものと思われる。大通院創建（1401年）以前に、何らかの施設が存在していた可能性が生じた。43の須恵器は古墳時代末（7世紀）のもので、大通院とはかわらないが、これまでに新橋町、堤町内で古墳時代の遺跡が確認されており、また田尻町に古墳も存在することから、砂丘上にひとびとが安定して居住していた時代を示している。

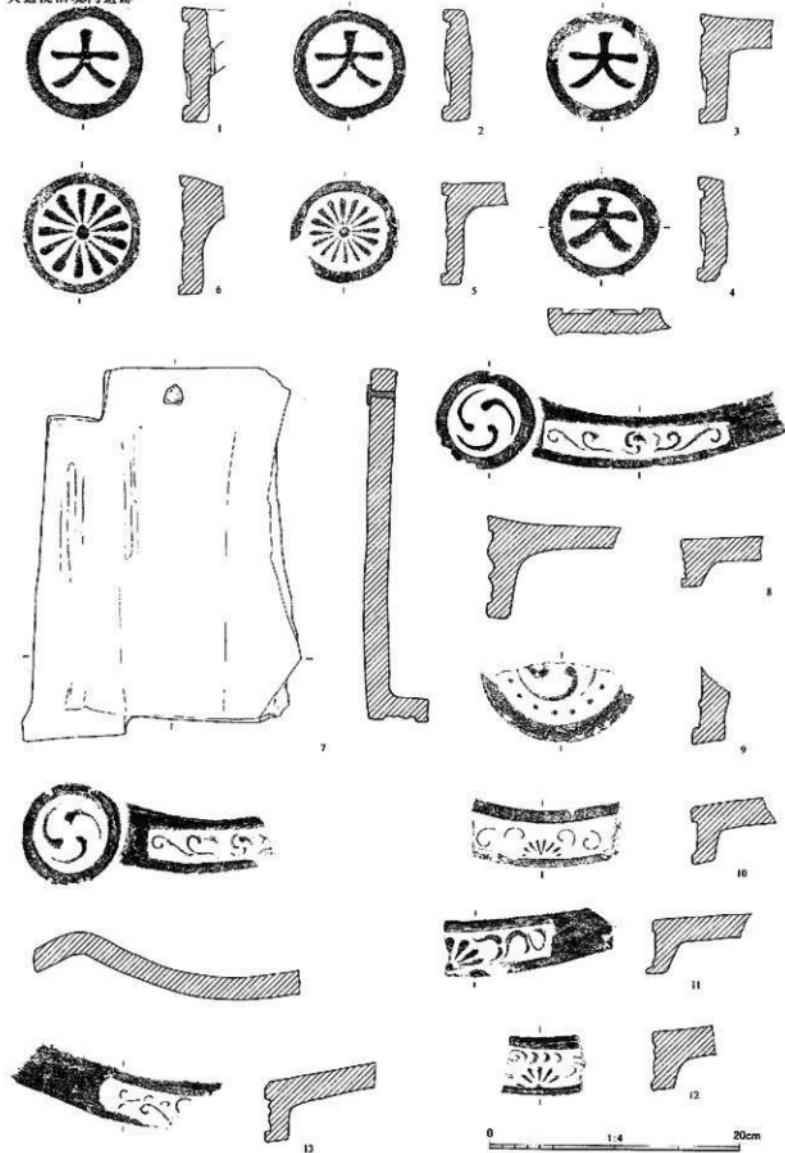
4. まとめと課題

短期間、小面積の発掘調査であったが、すでに地表にほとんど痕跡を残さない、中本山格の禅宗寺院の一角を実際に明らかにすることができた。伝承される舍利殿の再建年代と矛盾しないほか、創建時と再建時の伽藍配置が異なる可能性、また寺院創建以前の開発について、若干の提唱ともなりうる。大通院は、境内に4寺の塔頭が伝わるが、現存するのは光勝寺だけである。光勝寺の山門付近で東西に通じる道路は、現在宅地や小学校で寸断されているが、1916年の地形図では、新橋町の本村から大通院の中核部まで直線的に通じていたことがわかる。この道路を創建時の大通院参道と考えたい。本村付近に当時にぎわいが想像される。

本村の東には、湿地がせまっており、中世には内水面に接した港湾の一所を推定できる。また北側の東海道筋との間も東西に長い入江がじゅうぶん想像できる。大通院の北側には、当時船を直接着けることのできる岸辺があった。実際、前世纪まで、少なくとも3箇所に「河岸」が残っていたという。こうした外洋とも連続する水運の地という環境を再検討したい。内水面のあちこちに生じた港湾施設の盛衰や利権の争奪も、寺院と無関係ではあるまい。

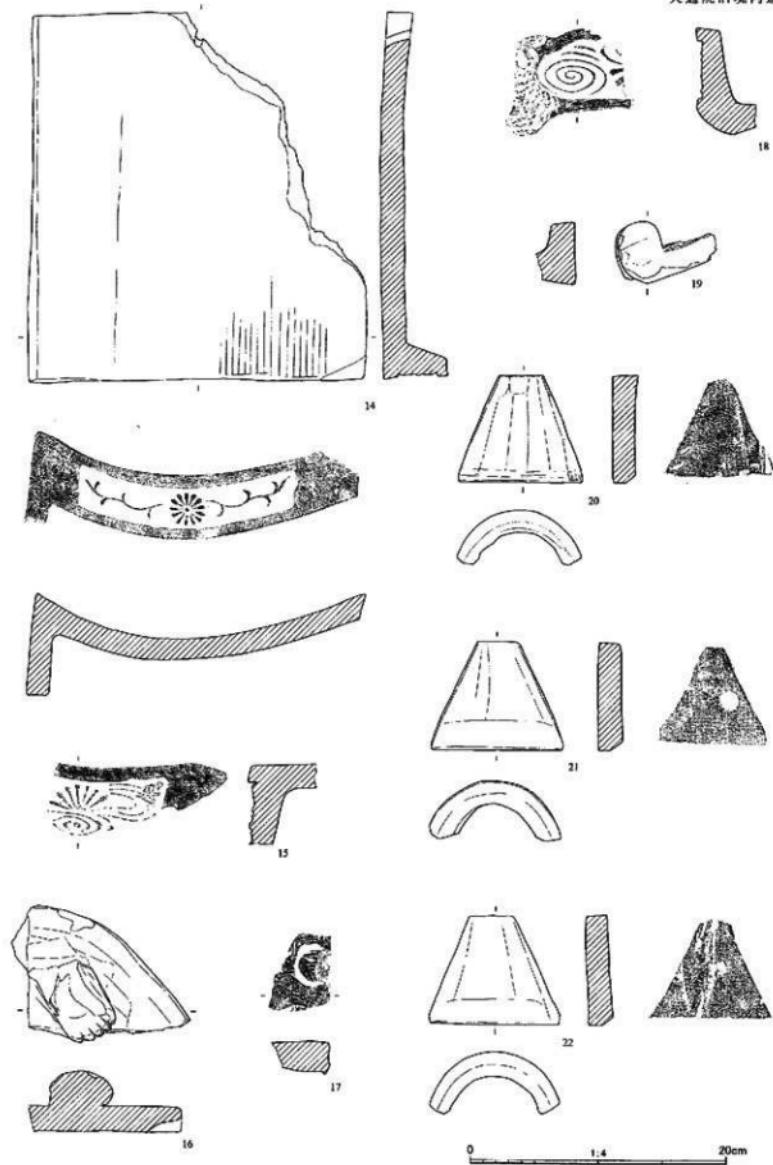
調査にあたっては、浜松市立新津中学校教職員また生徒のみなさんから多大なご協力をいただいた。光勝寺ご住職はじめ、地元のみなさんからも資料のご提供やご教示を得た。小規模な調査ではあったが、郷土の歴史を再構成する一助となれば幸いである。

大通院旧境内遺跡



大通院旧境内遺跡出土遺物 1 軒瓦・筒瓦

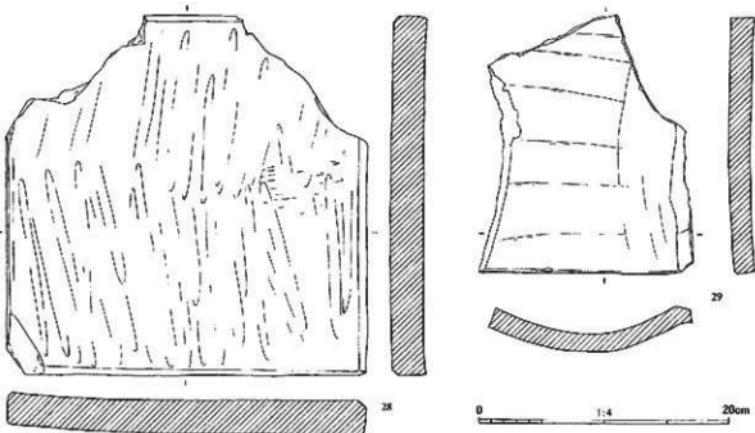
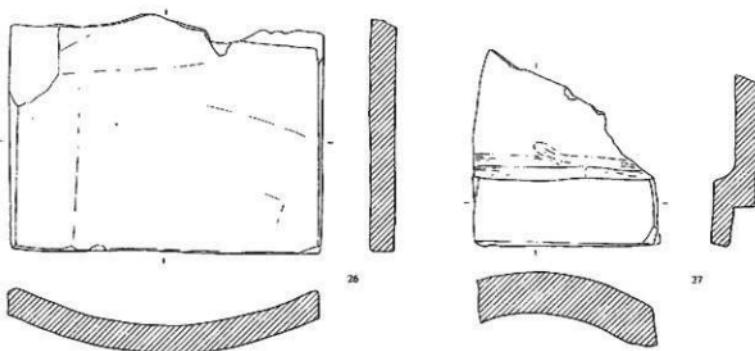
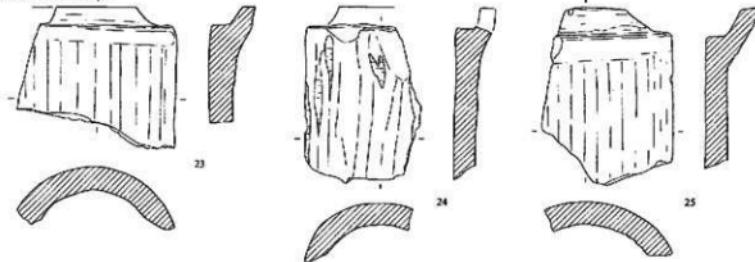
「大」の字が入った瓦当のうち上段は、現存する山門の旧瓦と同紋で、軒棟瓦と見られる。



大通院旧境内遺跡出土遺物 2 軒瓦・飾瓦

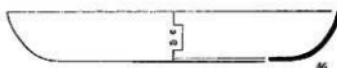
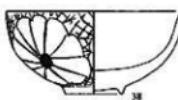
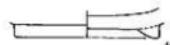
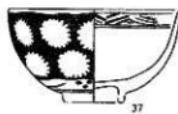
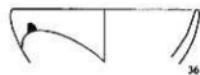
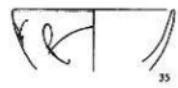
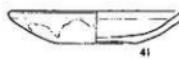
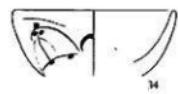
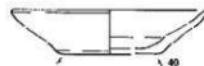
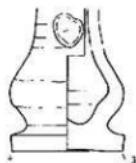
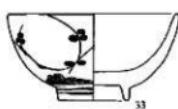
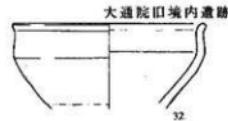
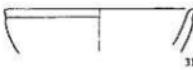
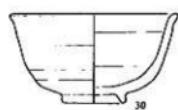
動物を模した瓦の破片、舷瓦片もある。三角形のものは、飾り棟に並べる輪違い瓦であろう。

大通院旧境内遺跡



大通院旧境内遺跡出土遺物 3 その他の瓦

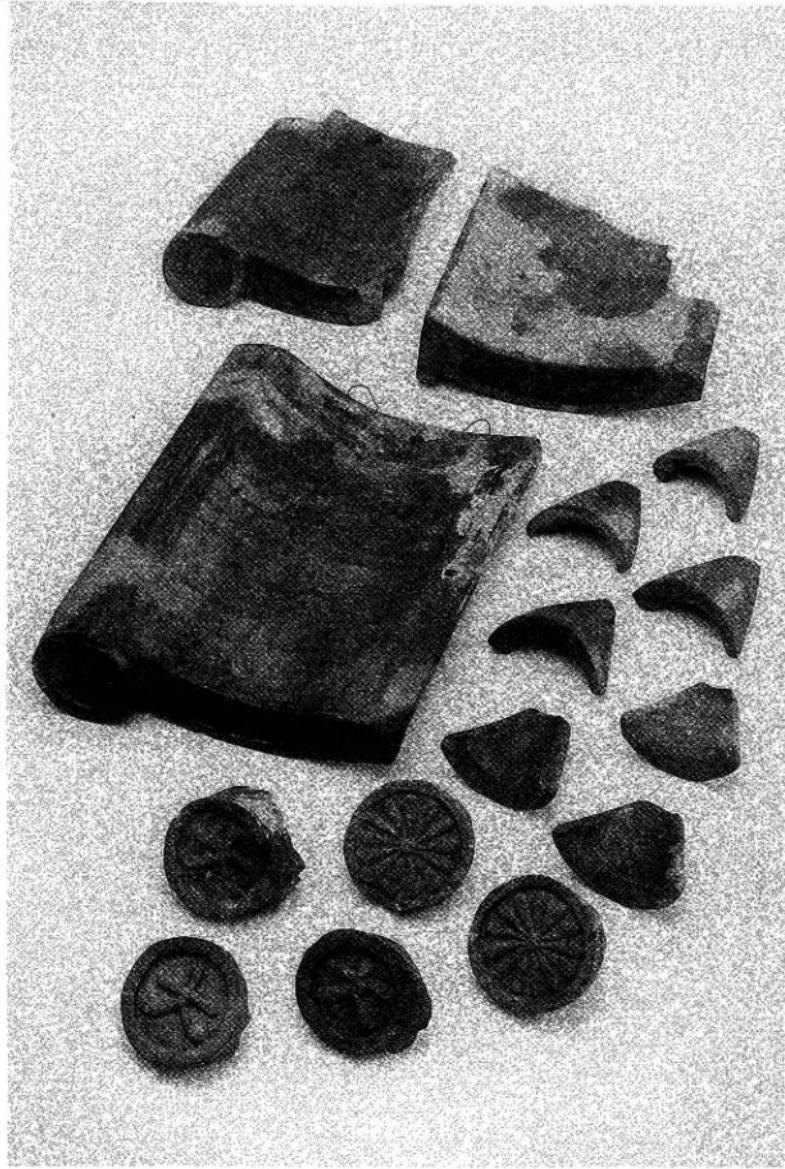
屋根の棟などを飾ったと考えられる瓦の破片。火災により倒壊した建物のものと思われる。



0 1:3 15cm

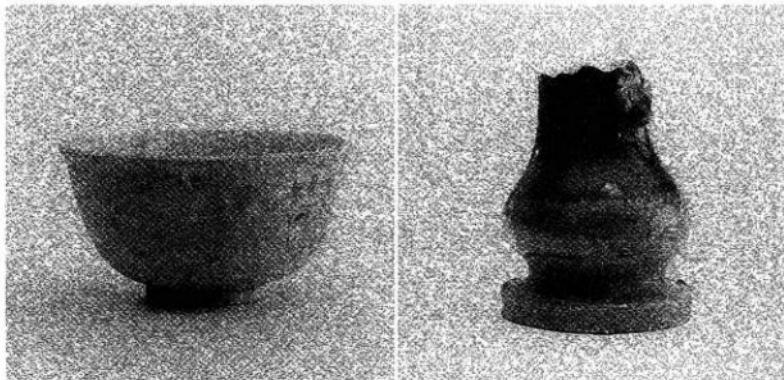
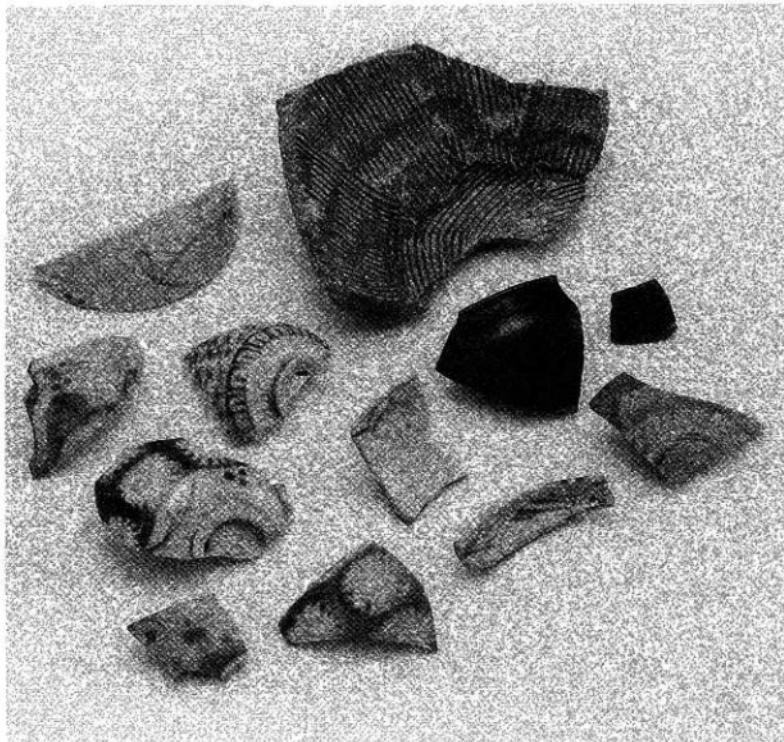
大通院旧境内遺跡出土遺物 4 陶磁器・鐵釘・銅碗

寺院で使われたものがほとんどだが、創建年代以前の土器片も発見され、注目される。



大通院旧境内遺跡出土遺物写真1 瓦

出土瓦を一括。中央の軒桟瓦は、大通院山門に葺かれた伝世品（末寺光勝寺で保管したもの）。



大通院旧境内遺跡出土遺物写真2 陶磁器類

多くは江戸時代から明治時代であろう。下段左は黄瀬戸か、下段右は鉄釉のかかる仏花器。

報告書抄録

書名(ふりがな)	大通院旧境内遺跡(だいつういんきゅうけいだいいせき)
副書名・巻次	静岡県浜松市新橋町 大通院旧境内遺跡発掘調査報告書
編著者名	太田好治 鈴木一有 井口智博
編集機関	浜松市博物館 〒432-8018 静岡県浜松市蜆塚四丁目22-1 Tel.053-456-2208 E-mail hamahaku@hamamatsu.city.shizuoka.jp
発行機関	(財)浜松市文化協会 〒430-0916 浜松市早馬町2番地の1
発行年月日	西暦 2002年7月31日
所収遺跡名・所在	大通院旧境内遺跡 静岡県浜松市新橋町748番地
遺跡コード	(市町村)22202 (遺跡)23-07
緯度・経度	(北緯)34度40分48秒 (東経)137度42分20秒
調査期間	(現地調査)2002年4月17日～2002年4月23日 (整理作業)2002年4月17日～2002年7月31日
調査面積・原因	約100m ² 公共建築(中学校体育館)の新設
遺跡の種別／遺構	寺院遺跡／溝・井戸跡・瓦溜まり(鎌倉～江戸時代)
掲載遺物の概要	山茶碗・かわらけ・天目茶碗片・陶器片・屋根瓦(棟瓦・軒瓦・輪違瓦・筒瓦等)(鎌倉時代～江戸時代)
特記事項	臨済宗方広寺派中本山跡地、江戸時代改築建物跡を確認するとともに開創年(1401)以前からの施設の存在を示唆。

大通院旧境内遺跡

浜松市新橋町 大通院旧境内遺跡発掘調査報告書

2002年7月31日

編集 浜松市博物館

浜松市蜆塚四丁目22番1号

発行 (財)浜松市文化協会

浜松市早馬町2番地の1

印刷 浜松市城北三丁目3番25号

株式会社シバプリント